
動乱のソウル・ソサエティ

Ⅱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動乱のソウル・ソサエティ

【Nコード】

N5142H

【作者名】

卍

【あらすじ】

旅過の進入、その裏に渦巻いていた王族殺害計画のため三人もの隊長の離反、ソウル・ソサエティの被害もある程度落ち着きまたいつものような日常がはじまろうとした矢先の異変、行方不明の一人の隊長、その理由とは……………？

プロローグ

ここはソウル・ソサエティ、現世で死した魂が長き安息を迎える場所

今このソウル・ソサエティがかつてない危機に陥っている。

異変が最初にかつたのは一週間ほど前のこと　いつも召集に遅れないのに十番隊隊長、日番谷冬獅郎が隊首会に来なかったのだ、結局日番谷冬獅郎が来ないまま隊首会は幕を閉じた。

そのことが十番隊士に知れ渡り十番隊副隊長、松本乱菊を始め一般隊士が総出で探したのだが結局見つからなかったのだ。

異変

ここは流魂街第一地区閨林庵の日番谷の実家、婆ちゃんは既に亡くなっており誰もいない、日番谷はいずれ来るであろう雛森や隊士あてに一通の置手紙を残した。

「今つきました!。」

隊士から乱菊に連絡が来た、

「突入!」乱菊の凜とした声が響いた。

今、日番谷は草鹿にいる、第八十地区と言うだけあってかなり治安が悪い、閨林庵とはすごい違いだ。

ふと後ろに気配を感じた。 「誰だ!」

「お願いです、お恵みを:」

何だ物乞いか:

一瞬物乞いの口元が緩んだように見えた、当たり前か、ふと後ろにわずかな霊圧を感じた。

「うおー!」

大男が棍棒を振りかざした。

少し霊圧がざわついてしまった、早く逃げなきゃ!

日番谷は瞬歩でその場から逃げ出した。 「何だこの・・・」

そこは空間の歪みがあった。

「ちようどいい」

日番谷は空間の歪みに飛び込んだ。

何だここは、一面の砂漠が広がっていた。

「やあ、日番谷君」

「藍染!」

次の瞬間藍染の斬魂刀鏡花水月が日番谷を貫いていた。どこだ

！ここは、叫んだつもりだったが声が出ない

「これで新たな同胞が生まれた。」 「ここはどこだ……」

「そうだ、日番谷君、一緒に来てくれ。」

「やあ、十刃諸君、君達にいいお知らせだ、僕達の新たな同胞

だ。」 「お前は、あの時の！」 なんだ？ 知り合いかい？ ルピ？」

復讐

「あいつは以前現世で戦った隊長です。」 「そ

うか、なら話しが早い彼には君達の訓練を手伝って貰おう、それからウルキオラ、以前話したが覚えてるかい？」

「はい、井上織姫の拉致計画ですか？」

「そうだ、好きな者を連れて行け。」

ソウル・ソサエティでは全員と言っているほどの隊士を動員したにもかかわらずまったく見つからなかった。 そんな中現世への派遣任務で乱菊、斑目、綾瀬川、阿散井が現世へ行った。

「ああ、そうだ君も行くかい？ グリムジョー。」

「……………」

こうして首尾よく井上織姫を拉致した虚圏側はいずれ訪れるであろうソウル・ソサエティとの戦いに備えて破面の強化訓練を開始した。

「これが崩玉だ」

信頼の証として織姫は崩玉を見せられた、 「そうだ、

私にしか出来ないんだ、私の能力でこの崩玉を存在する前の状態に戻してしまおう。」

ふとそのとき藍染の後ろに見覚えのある顔があった、

「日番谷君！」 何でここにいるんだろう。

「お前、何故俺の名を知っている、お前に名乗った覚えは無いぞ。」

「え…」

「そんな事はほっといて、始めに君の腕試しだ、グリムジョー

の左腕を治してやってくれ。」

「双天帰盾、私は拒絶する。」

舜桜とあやめが作り出した盾が左腕があったところを包んだ、凄いいスピードで左腕が治り始めた、完全に治ってからグリムジョーは織姫に背を向け、

「ここも治せ。」ともともと6の刺青があった所をさした、

「グリムジョー、お前どういうつもりだ！」

ルピが叫

んだ瞬間ルピの心臓をグリムジョーの腕が貫いていた、そしてグリムジョーは右腕を突き出し虚閃をルピの顔面に放った。

「これで俺が6番だ！」

邂逅

「じゃあ新たな6番グリムジョー、君は最初に日番谷君につきあつて貰つて特訓してくれ、たとえ怪我をしても気にすることはないから本気で戦ってくれ。」

「霜天に坐せ、氷輪丸」日番谷の刀から氷の龍が放たれた、グリムジョーはとっさに虚閃を放った、だが普通の虚閃では防ぎきれず結局ものすごいダメージを食らった。

「軋れ、豹王!」

「卍解!大紅蓮氷輪丸!」

「豹王の爪!」

「デス・ガロン!」

「氷輪百華葬!」

結局はグリムジョーは一瞬で氷漬けになり日番谷に軍配が上がった。

そのころ黒崎一護と石田雨竜、茶渡泰虎が浦原喜助の協力で虚圏に潜入した。

「十刃諸君、侵入者だ、要、つないでくれ」

「はい」

「彼らはかつてソウル・ソサエティにたった四人で侵入し護廷十三隊すべてと戦ったものたちだ。」

「ですが、やつらは三人しかいませんが?」

「そうだ

よくきざいたねウルキオラ、もう一人は井上織姫だ。」

「どこへいく、グリムジョー。」 「どこって、潰すんですよ。」

「待てグリムジョー、彼らを侮つてはいけないよ、各自自宮で待機するように。」 黒崎一護はグリムジョーを倒したがその後あらわれた第5十刃ノイトラ・ジルガによって戦闘不能に追いやられ、ネルが真の姿のネリエルになり奮闘するもネルの姿に戻ってしまった。

そのころソウル・ソサエティからの援軍、更木剣八、朽木白哉などが虚圏に訪れていた、

「何もねー殺風景なところだなー」

「霜天に坐せ、氷輪百！」

「なんだと！」剣八はとっさに刀で防いだ、

「何故兄はここにいる日番谷」

「何故俺の名を知っているんだ？」卍解！大紅蓮氷輪丸！」

「卍解、金色足殺地藏」

「さあ更木仕事だよ日番谷を浦原喜助の所へ運んでんてやれ」

「ケッ、仕方ねーな」

裏工作

「う……」

「やっと目が覚めましたねえ」

「……………」

「どうしたんですか？ 日番谷隊長」

「……………」

「まさか、忘れたとはいわせませせんよ」

「……………」

「しょうがない、もう一回自己紹介しますよ」

「私は、浦

原商店の店長、浦原喜助です」

「浦原、何のようだ」

「ソウル・ソサエティから強制捕縛令状がでています、強引にでも連行しますよ。」

「十番隊隊長日番谷冬獅郎、今までどこにおった？」

「分かりません、いきなり目の前に変な空間が広がってそこから藍染が出てきて、鏡花水月に貫かれたんです」

「ふむ、では日番谷隊長藍染はどれほどの戦力を集めておった？」
「よく分かりませんがアジューカスが約八十ほど」

「ウアストローデが、四十ほどでした」

「そうか、ならば死神は終わりじゃな」

「王属特務が動くとも思えん、こうなればもはや瀨霊廷の壊滅はまぬがれんじやろう、となれば我らの命尽きるまで霊王を守護するのじゃ！」
「日番谷隊長、また日番谷先遣隊を組織し現世の重霊地、空座町の守護に協力してはくれんかのう？」

「構いませんがメンバーはどのような？」

「日

番谷隊長、松本副隊長、阿散井副隊長、斑目三席、綾瀬川五席、朽

木ルキアじゃ」

「分かりました、いつ出発ですか？」

「遅くとも明日の朝までには向こう側に着いてほしいがの、無理はするでないぞ、」

「ええ」

「良かったんかな？、十番隊長さん捕まってしまったで」

「ああ、問題ないよ、何故なら、……………」

救援（前書き）

原作を知らない結構つらいと思います

救援

「何故なら、彼はソウル・ソサエティに裏工作員として送り込んだんだからね」

「あっちに寝返るなんてことはないよね」 「ああ、

洗脳した後、ソウル・ソサエティは大変な悪事を働いていると教え込んだからね」 「ならいいねんけど…」

その頃

「死にかけてんじゃねえか、一護」

「…け…………、剣八……………!!」

「…ホントに…剣八…なのか?…」

「あ? ボロカスにやられて頭までいかれちゃったか?」

「ソウル・ソサエティはこの戦いから手を引いたんじゃないかったのかよ?」

「浦原喜助だ、決戦が冬だと決まって浦原にじじいから幾つか指令があったんだ、1つは空座町で隊長格を戦闘可能にすること、もう1つは井上織姫の能力で崩玉を覚醒させようとしてガルガンタとか言う穴蔵を安定させて隊長格を安全に虚圏に送ること」

「で、その穴がやつとがっちりしたから剣ちゃんがきたの!」

「やちる、お前もすっこんでろ!」

「俺一人でいいっていったんだがな!」

「誰だい! きみは」

「その羽織、隊長格とお見受けする、私は討伐部隊隊長ルドボーンと申します、さあ名乗りなさい侵入者」

「名乗るまでもない、兄らの敵だ、」

「私は四番隊隊長卯ノ花列、同じく副隊長虎徹勇音」

「退くぞ」

「私達は血を止めるのが仕事です」

「破面、破面、十刃！虚圈は宝の宝庫だね！」

「名は何だ

死神」

「十一番隊隊長更木剣八！」

「第5十刃ノイトラ・ジルガだ！」

幼馴染

現世の派遣任務前日澁霊廷に衝撃が走った、

「裏廷隊のものじゃな」 「は隠密機動総司令官碎蜂様よりの命令です」 「うむ、続けよ」 「昨晚何者かの襲撃をうけた

十番隊が壊滅状態に陥っております、そこで明日の現世派遣任務より十番隊隊長日番隊冬獅郎様、同隊副隊長松本乱菊様の派遣を中止していただきたいとのことです」

「分かった、緊急の隊首会を開くと日番谷隊長以外に伝えよ」

「は！」

「誰なんでしょうねこんな事したの」

「判らねえが隊士が一晩で全滅とは相手は相当な実力者だ」

「隊長以上の力なんですかね？」

「まあ、ほぼ音も聞こえなかったし少なくとも十番隊と仲のいい奴だろ」

「……………」

「緊急の隊首会を開いたのは現世派遣任務をどうするかを決定するためじゃ」

「なら私が代役を務めます」

「ならん」 「何故ですか」

「隠密機動は情報収集や現場検証を行って貰う」

「現世派遣任務を廃案とする」

だがその決断がさらなる被害を受ける原因となるのをまだ誰も知らなかった。

今晩は隊士がいないため他隊の隊に泊まることになった、

「じゃああたしは八番隊行ってますね、隊長は五番隊に行ったらどうですか？ 雛森喜びますよ！」

「そうだな五番隊行くか」 （隊長やけに素直ねえ）

「あ、日番谷くんどうしたの？」

「今晚ここに泊まっていいいか？」

「いいけど、どうして？」

「隊士がいねえからな松本は八番隊行ってるから俺はここに泊まってるのかな、って思ったんだけど嫌ならいいぜ、隊舎行って寝るから」

「全然いいよ泊まっていきなよ」

「じゃあ厄介になるぜ」

ここは簡単に行きそうだな…

頭痛（前書き）

この先ぐろい表現が使われています

頭痛

「じゃあ日番谷くんお休みなさい」 「ああ、お休み」
雛森が寝たらこの隊も潰すか

「なんかうちの隊長様子がおかしいんですよね〜」 「
まあ僕も様子が変だと思ってたんだよね〜」 「やっぱり京楽
隊長もそう思いますか？」 「隊首会の時も様子が変でね周りの
ことを気にしてたね」 「そうなんですか？あたしはやけに素直
だと思ったわね」 「二人ともいい加減にしてください！」
「なによ七緒うるさいわね」 「聞いてください、今地獄蝶から
伝令がきました五番隊が壊滅状態だそうです」 「隊長！」
「どうしたの？乱菊ちゃん」 「あ、何でもないです」 「に
しても十番隊のつぎが五番隊だなんてね」

隊長……

「よし、雛森は寝たな」
「ぐあっ」 「ぐっ」
「がはっ」

後は雛森だけだな

どすっざしゅ

「ぐっ、嘘でしょ……日番谷……くん……」 後始末だ…
どしゅがはっ 「日番谷くん…何を……」

まだ十一も隊があるのか、でもこの隊は何で隊長がいねえんだろ……………

「火急である、昨晚五番隊隊舎に何者かが侵入し同隊副隊長雛森桃、五番隊に宿泊していた十番隊隊長日番谷冬獅郎が共に重傷、隊士は全滅！この結果旅過の捕縛を最優先にする」

「ところで、雛森ちゃんと日番谷くんの容態はどうなのかな？」
「ご心配なく、どちらも命に別状はありません」

四番隊救護詰め所

くそやり損ねたか
でも何なんだこの頭痛は

睡眠

「にしても、日番谷隊長は災難続きだねえ」

「そうだな、自分の隊士が全滅して雛森ちゃんも重傷、日番谷隊長も重傷負って大変だな」

「隊長！お見舞いしに来ました！隊長……………」 まだ意識が

戻らないのね… 雛森はどうしてるかしら

「雛森……お見舞い……………雛森も意識戻らないのね」

「は……、こんなんでだいじょうぶなのかしら」

意識がないように装うのも大変だな

「隊長ー、大変です」 「どうしたのですか、勇音」 「日

番谷隊長がいなくなっていました」 「日番谷隊長が……………」

「雛森から離れて頭痛はなくなったが、いったいなぜ……………」

「考えても仕方ねえか」

「日番谷隊長の傷は治っているので問題はないでしょう」
「でも隊長……」
「日番谷隊長がいなくなったなら意識が戻ったという事です、良かったではないですか」
「はい……」

ガチャ

ポリポリポリポリポリポリズズッ、ぷはー

「松本！」
「ひゃっ、驚かさないでくださいよ」
「驚かしてねえよ、それより何昼間っから酒呑んでんだ、仕事しろよ！」
「そんなことより意識戻ったんですね、心配してたんですよ」
「へえ、酒飲みながらねえ、だから何だっ、仕事しやがれ」
「散歩行ってきまー」
「あと、言い忘れたけど、これ以上さぼったら今年は給料必要最低限しかやんねえからな」
「えー、欲しいものいっぱいあるのにー」
「じゃあ仕事しろよ！」
「はーい」

一時間後

「隊長、お茶どうぞ」
「ああ、そこおいといてくれ」

ごくっごくっ
すーすーすー

「この眠り薬すごいわね」

現世へ…

「さてと、隊長寝ちゃったし呑みに行こつと」

「あら、まだ寝てるのね」

「帰ってきたか松本！」 「ひゃっ、隊長起きてたんですか？」

「当たり前だ！ 一体どれだけ時間経ったか分かってんのか？」

「うーん… 一時間ぐらいかしら」

「…三時間だ！ 言ったとおり給料必要最低限な」

「そんなくくひどいですよ隊長！」

「ひどいのはどっちだ！ 全然仕事してねえじゃねえか」

後日現世

「さて…どうするかな」

「帰ってきたか日番谷君次の仕事だ現世に行って黒崎一護を倒してきてくれ」

からっ

「ん？」

「冬獅郎！何でこっちにいるんだ？」

「実は現世に霊圧を消すことが出来る虚が現れたんだ」

「何も隊長が来なくても俺がいるだろ」

「お前みたいに霊圧探索が苦手な奴が霊圧消した奴を探すのは無謀だ」 「んだとゴラァそこまで言われて引き下がれるか！俺が先に虚見つけたら謝れよ！」

「分かったからさっさと探しに行くぞ」

「分かったよ」

「どこだ？虚の奴」

ズツザシュ

「！」

「な、なにしゃがる……冬……獅郎……」

かちや

「霜天に坐せ、氷輪丸」

「な……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5142h/>

動乱のソウル・ソサエティ

2010年10月9日01時54分発行